

岡山大学  
埋蔵文化財調査研究センター報  
第14号

1995年10月 発行

岡山大学  
埋蔵文化財調査研究センター

〒700

岡山市津島中3丁目1番1号

TEL・FAX (086) 251-7290



発掘調査の風景

ここ数年、「考古学ブーム」という言葉がよく聞かれます。連日のように華々しい発掘調査の成果が新聞紙上を賑わすことも珍しくありません。数百人、あるいは数千人にのぼる人々が遺跡の現地説明会に足を運んだという話さえ聞かれます。そうした「ブーム」で語られる華々しさとは別に、日本国中では年間数万件にのぼる発掘調査が行なわれ、全く話題にのぼることなく消えてゆく遺跡のほうが多いと言うのもまた実情です。

ところで、発掘調査と聞いてどのような光景を思い起こされるでしょうか。発掘調査は塀に囲われた中で行われることが多く、普段の作業風景が見られることは、案外少ないかもしれません。現地説明会で見ることができるのは、「説明会」のために用意された、発掘現場のある一瞬の光景に過ぎません。いったい、どのようにして発掘調査が進められているのか、実際の作業風景を目にされる機会は案外少ないのではないのでしょうか。この号では、そうした一般にあまり人の目にふれることのない、発掘調査の風景をご紹介します。

(写真は津島岡大遺跡第10次調査の現地説明会でのひとコマ)



## 発掘調査の風景

岡山大学の構内は、津島、鹿田の両キャンパスがそれぞれ、津島岡大遺跡、鹿田遺跡として知られています。埋蔵文化財調査研究センターでは、これまでに建物の新築や改築に先立って津島で13次、鹿田で6次に及ぶ発掘調査を行ってきました。遺跡には、これまでに我々人類が歩んできた足跡を記す履歴書のような一面があります。かけがえのない人類共有の財産であり、できる限り保存されることが望ましいのですが、現在の我々の生活との共存も必要です。そこで、やむを得ず事前の発掘調査が行われます。遺跡が姿を消す前に記録だけでも残そうという措置です。また、発掘調査によって最もよく遺跡の内容を知ることができるからです。

発掘調査をすると、現在の地形や景観が長年にわたって作り上げられたものであることがわかります。

例えば津島キャンパスでは、縄文時代から現在まで、1m以上の土層の堆積が見られます。土砂は古いものから新しいものへという順番で、下から上へと積み重なります。発掘調査では地表から下へ向かって掘り進むので、逆のプロセスをたどることになります。発掘調査は、いわば現在から過去へ向かって時間をさかのぼってゆく作業といえます。このため、発掘調査においてはこの土層の検討が重要です。地形の変化を読みとり、どの時代のものが発見されるのかを予想しながら作業を進めてゆきます。

一度掘り返した土は、完全に元には戻りません。たとえ元通りに埋め戻そうとしても、表土の汚れが混じったりするからです。また、洪水による土砂などで短時間にパックされる場合などは、特にその時の状況が鮮明に残されることになります。こうして過去の人々の活動の跡は地下に残されます。こうして大地に残された痕跡を、考古学では「遺構」と呼んでいます。これに対して、土器などの持ち運ぶことのできるものを「遺物」と呼びます。



津島岡大遺跡の土層

縄文時代から現代までの時間の経過が記されています。



掘り下げる

次の土層に向かってスコップで大胆に掘り下げていきます。



検出する

土の違いを見分けて線を引いていく。古代の水田畦畔の検出風景。



遺構を見つけるには、掘り下げた土層の上面をていねいに削り、平坦にすることから始めます。そうして表面に観察できる土の色の違い、土質の差を区別するのです。また、ここでも土層の観察が重要になります。このプロセスを何度も繰り返すことで、かつての水田や集落が再び姿を現し、文献資料ではうかがうことのできないような、庶民の暮らしぶりまで知ることのできるデータが得られるのです。

調査を進めるにつれ、土器をはじめとしておびただしい量の遺物が出土します。時には、土器や木器が原形をとどめて出土することがあります。竹べらや刷毛で丁寧に土を払うと、遺物が姿を鮮明に現れます。発掘調査と聞いて、多くの人がこうした光景を連想するかもしれませんが、しかし、土器のほとんどは小さな破片となって出土するものばかりです。完全に近い形で発見される遺物が「価値がある」と思われがちですが、調査終了後の屋内作業で破片を組み上げて原形を復元できることもありますし、何より、破片のひとつひとつが土層の時期や遺構の性格を知る手がかりとなるのです。

検出した遺構は、実測図や写真によって記録します。実測図にはそれぞれの遺構の平面的な位置、高さ、土層断面の状況などが記録されます。遺構と遺構の位置関係や前後関係、出土した遺物との関係、そうしたそれぞれの「関係」が、遺跡の成り立ちや構造を考える上での鍵となり、遺跡を評価してゆく上で重要な材料となるからです。また写真は、色や立体感など、そのときに調査員の目に映った状況を、よりリアルに記録できるという利点があります。

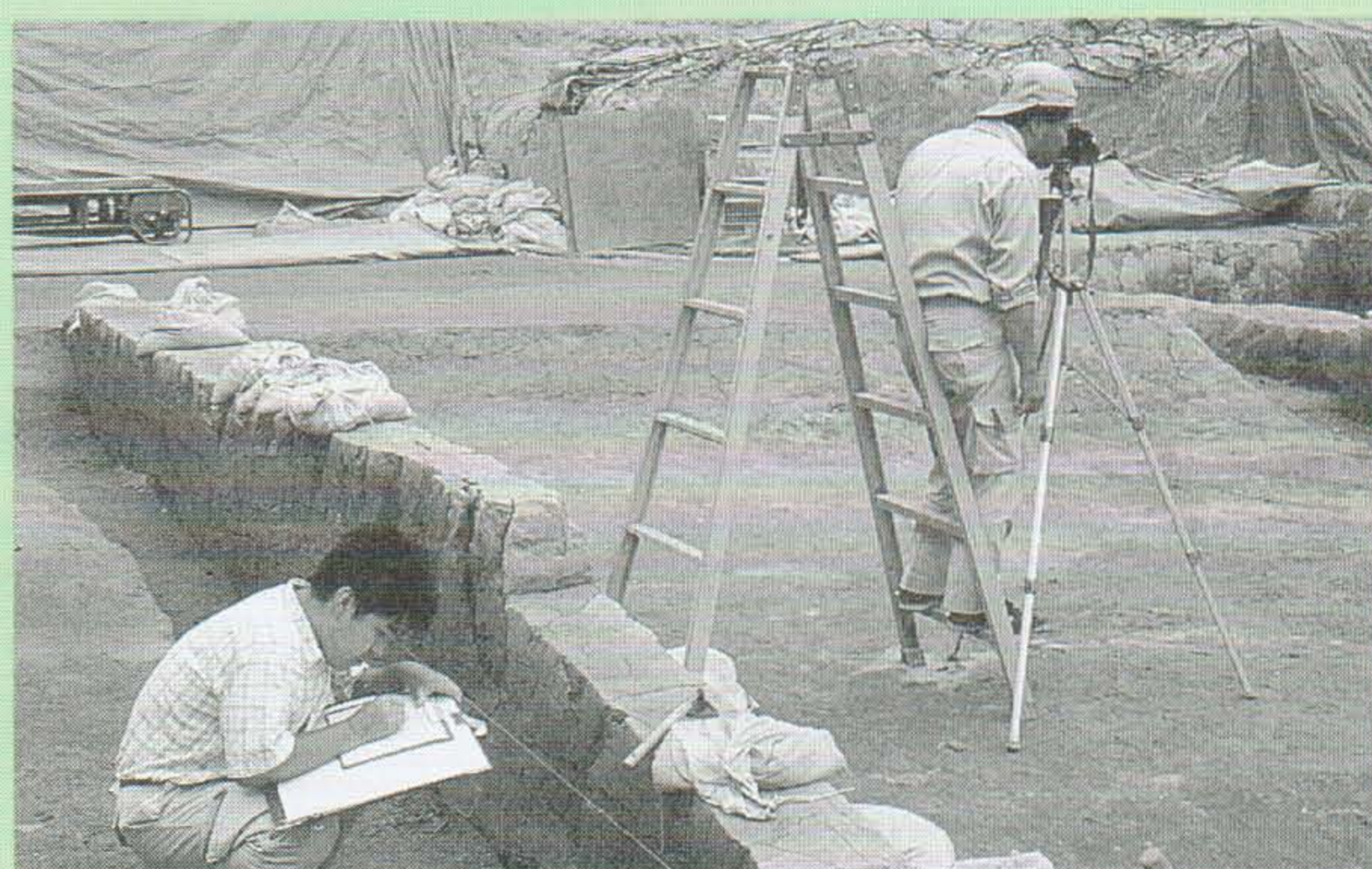
しかし、こうして調査、記録された遺跡も、調査後の開発行為によって失われてしまいます。あるいは調査の途中でも、さらに古い時代の地層へと掘り下げるため、すべて姿を消してゆきます。そうした意味で、発掘調査はやり直しがきかないという一面をもっています。

(光石 鳴巳)



原形を保って出土した土器と木器

上 縄文土器 (津島岡大遺跡第9次調査)  
下 弥生時代の木製の鍬 (津島岡大遺跡第12次調査)



記録する

実測図と写真は発掘調査の記録にもっともよく使われます。



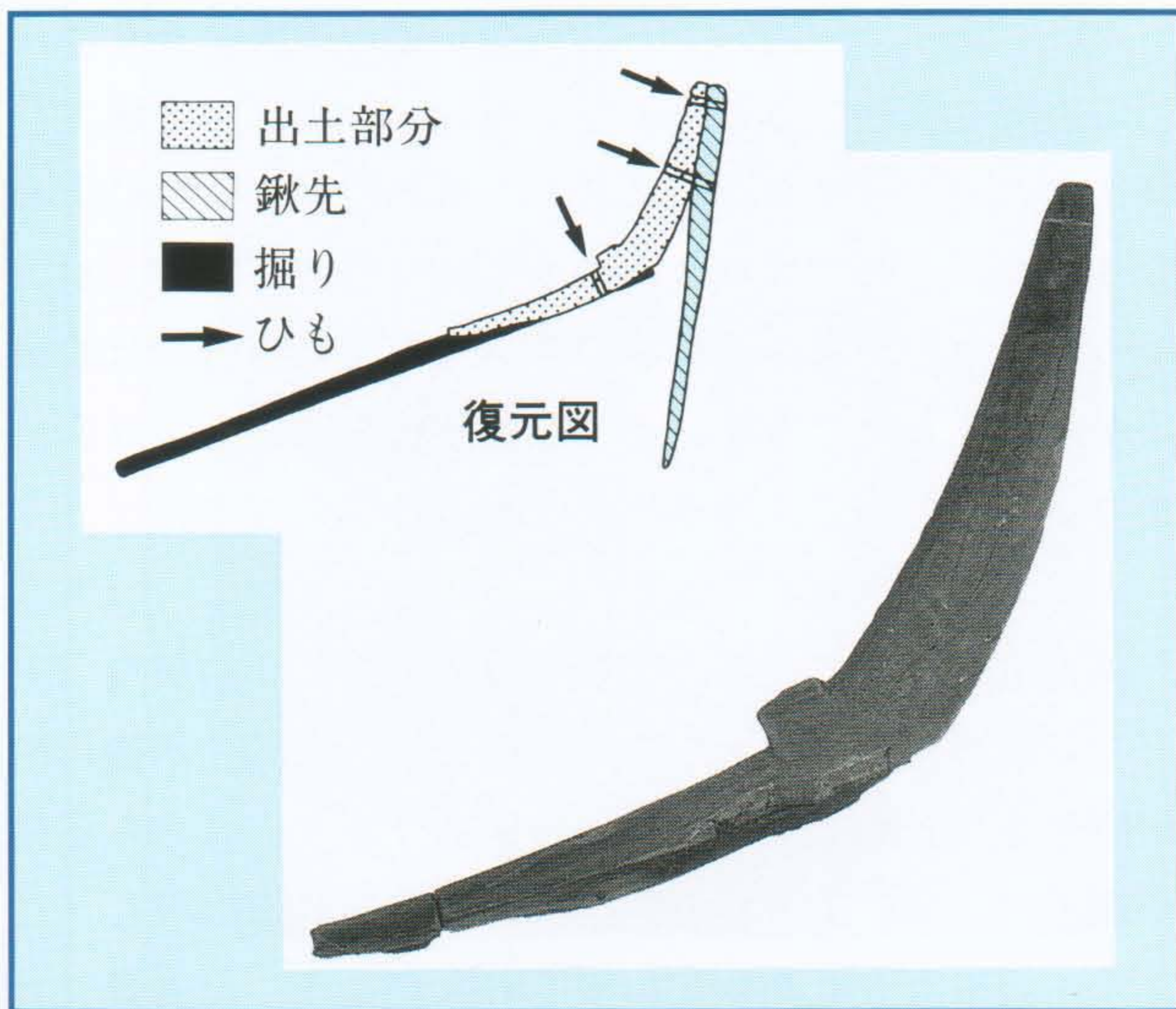
## 最近の発掘調査から

### 弥生時代の木製農具

津島岡大遺跡後第12次調査

1994年の図書館建設に伴う発掘調査では弥生時代の終わり頃の大きな溝の中からたくさんの木製品が発見されました。写真はその中のひとつ、「曲柄（まがりえ）」という鍬の柄の部分です。よく観察すると曲柄と鍬先、曲柄と握りとをそれぞれ、ひもでしばった痕がわかります。鍬の角度は鋭く、堅い地面を力強く掘り起こしていたのでしょう。

(岩崎 志保)



### 弥生時代から古墳時代の溝群

西から見る。右手前が大溝。

### 津島岡大遺跡第13次発掘調査

～福利厚生施設(北)予定地～

調査は1994年10・11月と、1995年7月から10月にかけての、あわせておよそ5ヶ月間行いました。調査の終盤には弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての多数の溝が見つっています。

これらの溝は、いずれも北西から南東に向けて、調査区を斜めに横切る形で見つっています。中でも、調査区の南西隅に位置する溝は、深さ1mをこえる規模で、幅も10m前後と推定されます。前号で紹介した12次調査（図書館増築予定地）の大溝につながるかと考えられます。木製品などの出土が予想さ

れましたが、少量の土器が出土した以外、残念ながら、この調査区では見つかりませんでした。

また、溝が作られていない調査区の北東部では、地形もやや高くなっています。ここでは、黒色土と呼ばれる弥生時代前期頃の土層の上面で、水田の畦畔が検出されています。

(光石 鳴巳)

### 調査開始のお知らせ

津島岡大遺跡第14次調査

今年度（1995年度）の後半には福利厚生施設（南）予定地での発掘調査が行われます。隣接す

る保健管理センター予定地での調査地点（津島岡大遺跡第10次調査）では、弥生～古墳時代の集落が見つっており、今回の調査でも、同様の成果が期待されます。2月頃までの期間を予定しておりますので、一度足を運んでみてください。